

目的：平成元年に小・中・高校の教育課程が改訂され、平成8年度、高校で全学年が新教育課程での実施となった。特に、家庭科教育の面では小・中・高校一貫での男女共修が実施され、新しい家庭科教育の第一歩を踏み出したといえる。

そこで、本研究は家庭科教育研究の変遷を通して、家庭科教育研究の実態を把握し、数回に渡る教育課程の改訂が家庭科教育研究にどのように反映しているか、さらに家庭科教育の主な学問分野である家政学との関連を明らかにすることにより、今後の家庭科教育研究の方向や課題を検討するための資料を得ることを目的としている。

方法：日本家庭科教育学会誌第1号から第37号に掲載された研究論文768件を対象とした。今回は、家庭科教育研究の年次的変化を把握するために、①発表件数、②研究者の所属、③研究者人数、④研究対象、⑤研究分野の5項目について調査した。

結果：研究発表件数は、1980年代に急増している。1960年代は単独研究がほとんどだが、1975年ごろより共同研究が多くなっている。研究者は国公立・教育学部に所属している割合が多く、小・中・高校における家庭科教育の実践報告が多い。

研究分野では、いずれの年代も食物分野・被服分野の割合が多く、住居分野は少ないことが分かった。